

刀剣乱舞：鶴丸国永&大包平夢

「ていーたいむ」

Sample

現世・某国際ホテル内・バー&ラウンジ

「……」

沙紀は紅茶を口にしながらちらりと隣と前を見た  
目の前には赤褐色の髪に灰銀色の瞳の不機嫌そうな

青年

そして、横には美しい銀髪に金色の瞳をした青年が  
いた

大包平と鶴丸である

不機嫌そうに珈琲を口にする大包平とは違い、沙紀  
の隣に鶴丸はそんな大包平が目に入っていないという  
風に、沙紀に向かって

「沙紀、ほらこっちも食つてみろ」

そう言つて、ケークスタンドに載つてあるマカロン

を取ると、沙紀に差し出した

「あ、ありがとうございます」

沙紀は苦笑いをしつつ、そのマカロンの乗つた皿を  
受け取ろうとした

が、さつと何故か鶴丸に避けられていしまった

「あ、あの……、りんさん？」

何故、勧められたのに避けられるのか

そう思つていると、鶴丸がそのマカロンを手に取り

「ほら、口開けろ」

「え、あ、あの……」

流石にここでそれは……と、沙紀が口籠もる

ちらりと、横目で大包平を見ると、眉間のしわがびくびくと動いていた

だが、目の前の鶴丸はまるで大包平など目に入つて  
いないという風に

「いいから、口開けろよ」

そう言つて、流されるままに鶴丸の手で口の中にマ

カロンが入れられる

「あ……」

瞬間、甘い苺の香りと味が口の中に広がった

「美味しいだろう？」

そう嬉しそうに言う鶴丸に、沙紀がこくこくと頷き

ながら、恥ずかしそうにかあつと類を朱に染める

「もう一つ、食べるか？」

そう言って、また鶴丸が別のマカロンを手に取ると、

沙紀に差し出した

それを見た沙紀が慌てて

「あ、あの、自分で食べられますので――」

そう言うが

「俺が、沙紀に食べさせてやりたいんだ」

と、あっさりと返してくる

が……沙紀はそれどころではなかった

るし

なによりも、目の前に座つて眉間のしわを深くさせている大包平が一番気になつた

「あ、あの、りんさん……？」 その、大包平さんが

物だと思えばいい

「大包平？ ああ、気にするな。 あれは単なる置き物だと思えばいい」

ぴくつ

「え、あ……、いえ、その……」

「それおとも、何か？ 沙紀は俺よりもあんな置き物の方が気になるのか？」

ぴくくつ

「そ……つ、そういうことではなく――」

「ほら、口開けろ。 あーん」

「りんさん――」

その時だった

突然、沙紀の前に座つていた大包平が ばんっ！

とテーブルを叩いたかと思うと

「つるまうううううううう!! 何故、貴様がここにいる!?

「あ、置き物が喋った」

「だあれが、置き物だ、こらあ!! そもそも、何故貴様がここにいる!? 俺は、沙紀だけしか誘っていなあ

あい!!

そうなのだ

実はあるの通信は、大包平からのお茶のお誘いだったのだ

周りの客たちが皆こちらを見ているのだ  
恥ずかしすぎる……っ!!

穴があたら入りたい気分だ

少し気晴らしがしたかったのもあり、沙紀はその誘いを受けた

がなぜか、鶴丸にバレた

そして、今に至るのである

二人（正確には大包平だけ）が、ぎゃんぎゃん言い合いでいるのを見て

沙紀が「帰りたい……」と、思ったのは言うまでもなく……